新潟県立村上高等学校同窓会関東支部

お宮

題字　宮　絢子
2010.5.15
第21号

発行人　佐藤　勝
編集　山下　治郎
事務局　長谷川康夫
神奈川県川崎市
麻生区向原3-5-5
☎044(953)8368

ドドーン・ドンドン集まれ！

2010 関東支部 同窓の集い ご案内

二〇一〇年度は我々二十三回生が「同窓の集い」の実行幹事の大役を相務めることとなりました。九月に実行準備委員会を立ち上げて以来、毎月一回の定例準備委員会を開催して総会・懇親会の準備を進めて参りました。

今回のアトラクションは同期生の八藤後忠夫君が顧問をしている文教大学越谷キャンパスの和太鼓サークルの学生さん達をお招きします。佐渡島の「鼓童」の流れをくむ和太鼓演奏をお楽しみ頂けたらと思います。和太鼓のアトラクションを行うに当たり、音量について気にしていましたが、先輩のお力添え、会場であるスクワール麹町の関係者の寛大なる計らいにより実施することができましたことを心より感謝し、御礼申し上げます。

また例年、出席者にお渡ししているお土産も今年は村上物産店の中から選ばせて頂きました。故郷・村上を思い出して頂けたら幸いです。実行幹事役を努め、「同窓の集い」を開催するに当たり様々な物語や歴史を肌で感じ、そして諸先輩方が築き、引き継いでこられた村高の伝統を我々二十三回生もしっかりと受け止めて、後輩の二十四回生以降へ引き継ぐべき思いを一層強く致しました。先輩の皆様方、後輩の諸君！同窓の巡り合わせ・ご縁を大切にして頂き、お誘い合わせの上でご参加ください。出席をお待ちしております。

（文　川又）

会　　長　佐藤　勝
実行委員長　川又　茂
新制二十三回　実行委員一同

2009総会の様子

○とき
平成二十二年六月十九日（土）
正午より受付開始・一時開会
○ところ
スクワール麹町
千代田区麹町六―六
☎０３（３２３４）８７３９
○アクセス
・ＪＲ中央線・総武線四谷駅
下車麹町口徒歩二分
・地下鉄丸ノ内線・南北線四谷駅
○会費
・男女とも　八千円
・平成十八―二十一年卒　四千円
・新卒者（二十二年卒）　無料
※会場準備の都合上、五月三十日（日）までに出欠のご返事をお願いいたします。

交流を大切に

佐藤　勝（新14回）

村上高等学校同窓会関東支部会員の皆様に改めてご挨拶申し上げます。昨年六月開催の「同窓の集い」総会におきまして前任の本間会長の後任として会長職を引継ぎました十四回生の佐藤勝です。

新役員で若返り

創立一一〇周年にもならんとする伝統ある村上高等学校同窓会関東支部の会長という重責に当初大いにプレッシャーを感じましたが、多くの先輩方や同僚・後輩の援助と協力を頂きながら新体制をスタートさせてから早一年近くが経過します。この間、昨年から今年の実行委員の引継ぎ会や新役員幹事会、広報紙「村高」の編集会議など、なるべく役員間での顔合わせを多くして意見交換の場を持つよう努力しております。若返りを図った五人の副会長はそれぞれ担当を持ち、この新聞も山下新副会長のもとに出来上がりました。ＨＰなども新たな取り組みをしてもらっておりますので、是非ご覧頂き、ご意見やご注文などお聞かせ頂けたら幸いです。

昨年九月には本校の同窓会総会にも出席させて貰い、各支部長さん達ともご挨拶する事が出来ました。本校でも

長年会長職を務めてこられた加藤幹司さんが退任され、私と同姓の佐藤新会長が誕生となりました。今後も本校や支部との交流を大切にして行きたいと思っております。

新役員一同、村上高等学校同窓会関東支部の活動に一生懸命取り組んで参ります。今後ともご支援、ご協力の程を宜しくお願い致します。

（東京都西東京市在住）

肩の荷を下ろして

本間　勝治（新９回）

昨年六月の総会にて三期六年に亘る当支部会長の任を終え、佐藤新会長と交代致しました。会員の皆さんのご協力により、お陰様にて無事にバトンタッチ出来ましたことに深く感謝申し上げます。会長の任に当たっていた時は「同窓会は先輩と後輩との楽しい出会いの場」をモットーに運営と組織拡大の二つの事を心掛けました。年一回開催される総会を中心とした運営は、卒業回順送りの実行委員会制を行いました。この制度は二十年来継続し、当支部の伝統としてすっかり定着しました。この事が総会の内容をますます充実させており、他校の同窓会の人たちより村高同窓会の関東支部の活動を羨ましいと言う声さえ聞かれるようになりました。

組織の拡大につきましては、広報活動の充実を目指し広報紙「村高」の紙面の刷新を編集長の大滝修さんを中心に行うと同時に、インターネットホームページの新設を小野安雄前副会長を中心に行いました。お二人にご尽力いただき新しい一歩を踏み出せたと思っています。特にホームページの運営は年一回しかない広報紙の隙間をカバーする役目を充分に果たし、執行部からの連絡や、会員の動向などを常時タイムリーにお知らせ出来るようになり、会員の関心も高く延べアクセス数ではありますが一二〇〇〇ヒットを越える程になりました。振りかえると広報活動の次に、サークル、同好会の輪を広げ組織拡大につなげたいと考えていましたが、現在活動している同好会は発足以来二十年以上も続く「臥牛会」ゴルフ同好会だけで輪を広げることが出来ませんでした。スポーツや趣味などを通して関心のある皆さんが同窓の友と集まれば最初は小さな輪でも少しずつ大きなものになるのではないでしょうか？この事は新しい執行部の皆さんに引き継いでいただきたいと思っています。最後に、母校の先輩でおられる元法務大臣故稲葉修先生（旧二十四回生）の教えであります「先輩に対してその礼厚く、同輩切磋直言敢えて憚らず、後輩に處して隔つるところ無し」の精神に則り、今後も関東支部の発展に協力して行きたいです。

（東京都多摩市在住）

「やばい事になった！」

二十三回生当番幹事奮戦記

櫻井　繁雄（新23回）

総会への参加案内が例年のように届いたが昨年は少々違う、二十二回生の先輩より来年度は我々が当番幹事ですとの案内が届いていたのだ。出欠を悩んだが同期の人に会える期待が勝って出席の返信を送ってしまった。当日受付にて同期参加者が二名で来年宜しくとの励ましを受けた。総会資料の出席名簿を見ると高校時代は面識も無い名が記載されていた。「やばい事になった！」と参加した事への後悔の念が芽生えてきたのだった。しかし初対面の二人が会話をしていると四十年間の時空を超え、クラスメイトや諸先生方との接点で距離が急速に縮み出したのは不思議で、故郷・出身地が同じと云うだけでも懐かしさを感じるが、高校の同級生となるとなお一層である。同窓会終了間際に壇上にて来年度の当番幹事として紹介され、決意を延べさせられ覚悟を決めざるを得なかった。我々二名は総会終了後の先輩達の同期会に飛び入り参加させて頂

■ 村高関東支部役員一覧 ■

役職	氏名	卒業回
会長	川士 景	旧40回
誉問	小郷 邦男	旧44回
顧問	長間 勝治	新９回
〃	本間 勝	新14回
長	佐藤 平	新17回
長	山本 宏	新17回
会	宮子 絢子	新17回
〃	濱中 壽子	新18回
〃	山下 治郎	新19回
〃	中村 修平	新21回
〃	長谷川 康夫	新10回
務局長	菅井 眞人	新13回
監査	遠藤 きみ子	新21回
計	鈴木 喜一	旧39回
〃	富樫 利男	旧40回
事	岩間 昌昭	旧42回
事	近 五郎	旧46回
事	船山 泰三	旧46回
事	木村 一昭	新１回
事	川上 孝	新２回
事	小田 正二	新３回
事	川村 正	新４回
事	村川 赳	新４回
事	渡辺 教	新５回
事	中野 孝子	新６回
事	野中 素子	新６回
事	荒木 千枝子	新６回
事	齋藤 廣	新７回
事	林 實子	新７回
事	市岡 節	新８回
事	木藤 貞雄	新８回
事	中野 克子	新８回
事	小池 菊栄	新８回
事	関根 悟朗	新９回
事	鈴木 洋子	新９回
事	小林 亮	新10回
事	小野 ミチ	新10回
事	稲葉 安雄	新10回
事	横山 興武	新11回
事	板垣 昇	新12回
事	小野 成也	新13回
事	伊藤 繁	新13回
事	黒岩 衛	新13回
事	佐野 紘子	新14回
事	尾崎 清克	新15回
事	松澤 茂	新15回
事	川村 正	新15回
事	田所 稔	新16回
事	本間 和子	新17回
事	中村 保	新17回
事	緒方 憲	新18回
事	高橋 和彦	新18回
事	秋山 光	新18回
事	菅井 繁夫	新18回
事	長坂 芳行	新19回
事	志田 初雄	新19回
事	山田 三重子	新19回
事	平山 裕	新20回
事	瀬下 真吾	新20回
事	斉藤 恵美	新20回
事	山崎 江二	新21回
事	川上 勇一	新21回
事	美濃 久男	新21回
事	八藤後 幸男	新21回
事	鳥屋 忠三	新22回
事	木村 和行	新22回
事	川又 栄二	新23回
事	櫻井 春夫	新23回
事	永井 茂	新23回
事	中村 繁雄	新23回
事	相馬 賢吉	新26回
事	丹田 英之	新29回
事	本間 章	新30回
事	篠崎 安夫	新30回
事	前田 美恵子	新31回
事	本間 泉	新34回
事	健	新36回
事	志	定11回

き、同期への働きかけに関して助言を得て少しは気持ちを軽くする事が出来たのだった。後日の役員会の反省会に参加させて頂き、その席にもう一名の同期生の参加を得て三名にて準備委員会をスタートする事と成った。八月に初めて会合を持ち、卒業アルバムを片手に四十年間のブランクと接点を探しながら思い出を語り合い、九月に同期会会合を開催すべく案内を発送する事とした。無事案内を発送したが、返信三十八名と云う心細いスタートと成った。九月の第二回の準備委員会には先輩一名と同期生十二名の参加を得て開催することができホッとし、参加者の賛同を得て主要役割分担（名誉職も含め）と、同期会も立ち上げる事が出来た。この時は少々度を外してしまい、次回は注意しようと反省をする事と成った。以降毎月一回のペースで会合を開催し、議題検討をそこそこに一次会・二次会の飲み会で昔話に花を咲かせている次第である。十二月の忘年会には十四名、二月の第一回目の同期会には二十二名と、会合を重ねる毎に参加者も増え、六月総会本番に向け同期の協力と結束を得て頑張ってきた。

　我々は高校三年次に創立七十周年を、今回の総会では創立百十周年を迎えると云う記念すべき年に当番幹事を務める事に成り、気を引き締めて準備に勤しんでいる。後輩の方も同じ様な経験を積むかと思うが、結構楽しいものですよ。同期・同窓の力を信じ次の世代へバトンタッチして行きましょう。「やばい事」は同期の輪で楽しいものに変わった！

（神奈川県川崎市在住）

関東支部同窓会総会、幹事を終えて

美濃　忠三（新22回）

　村高を卒業し四十年になろうとしております。同期の八藤後さんから二十二回生は、二〇〇九年六月関東支部同窓会総会の幹事役となり我々は率先して幹事を引き受けなければならないと強引にさそわれました。以来仕事のスケジュールもあり、出来れば断りたいと思いました。

　しかし最初の幹事会を開催し、三十九年と言う気の遠くなるような昔に別れた同期生と再開した時、胸がどきどきしました。遠い昔に忘れた淡い恋のときめきを再び感じたような気持ちになりました。会合を重ねて行くうちに成熟した大人の恋（？）に変わって行きました。仕事をしているより楽しくなりました。頭に霜をいただいた面々は、夫々人生の酸いも甘いも味わい、ちょっと言葉を交わしただけで、四十年前の学生時代に瞬時に戻る事が出来ました。乾杯で初対面のぎこちなさも全て吹き飛び、学生時代に言葉を交わす事もなかった面々と親しく会話し、総会の準備は五分かそこらで後は総会とは関係ない話題で2時間も3時間も世間話やら、無駄話やらで、ほんの少し罪悪感をも感じながら、楽しく過ごせたのは最高に幸せでした。久々に青春時代に戻り、遠い昔の時代を懐かしく思い出しました。学生時代の同級生の顔を、友達と交わした言葉をはっきりと思い出すことが出来ました。そして四十年後、自分の周りに新しい友達が増える事はとても幸せな事だと思います。何でも話せて理解しあえる友達が出来たのですから、幹事の打ち合わせはとても楽しいものでした。

　毎日、満員電車の通勤に疲れ、仕事のみの生活に飽きていたところに、新しい息吹を吹き込まれた感じがし、次回の会合が待ち遠しくなりました。

　会合を重ねる度に新しいメンバーが増え、新しい出会いが増え、打ち合わせが楽しくてたまりません。一次会が終わると必ず二次会があり、さらにいろいろな話題に花を咲かせます。このような会合がいつまでも続いて欲しいと思いましたが、楽しい事は早く終わるもので、やがて総会も終わり、会合をする名目が無くなると、とても淋しくなりました。

　我々同期も後数年で還暦となり、人生の一つの節目を迎えます。今後自分の生活をどうするのか既に決めている人もいると思いますが、小生のように未だ決めかね、迷っている人も多いと思います。このような時にどうするのか、やはり同窓会の諸先輩方にいろいろ聞くのもよし、同期の面々といろいろ話し合うのもよし、毎年開催される同窓会でこの辺を話題にしたいと思っております。利害関係やしがらみのない友人を、会社関係や自分の身の周りに捜すのは難しいと思っておりましたが、今回の同窓会幹事を通じて同窓会のメンバーや同期には簡単に見つけられると思いました。これからは先輩や同期、あるいは後輩とも積極的に会話をし、相手の生き方を参考にしながら、

自分の生き方を見つけて行きたいと思っております。皆様どうか私の質問に嫌がらずに付き合って下さい。

（埼玉県所沢市在住）

ある回想

横田　謙輔（新２回）

盛唐の人高適に「除夜の作」の七言絶句がある。「旅館の寒灯独り眠らず　客心何事ぞ　うたた凄然たる　故郷今夜千里に思う　霜鬢明朝又一年」〈旅先の宿で大晦日を迎え、眠れぬまま旅愁を訴え、霜のように白くなったびんの毛にもう一つ年を重ねるのだ〉とある。時に、年取りは容赦なくやって来る。その度にこの詩を想う。年経る毎に郷里の大晦日が思い出される。帰省し家族揃って食膳につき、歳徳神を祭り、食事が終わると一つ歳を取った事になる。独身の頃、私が帰省しない大晦日には陰膳を添えたものと後日知った。当時は数え年であった。

私共は昭和六年生まれで、誕生の年に満州事変が始まった。やがては遂に日本国家の存亡を賭ける戦争に至った。昭和十三年岩船小学校入学。男女別学で児童数八百五十余人。上級生に後の坂野上明・北海道新聞社会長、木村初男・名大名誉教授、鈴木治輔・第四銀行会長らが在った。

昭和十九年県立村上中学（旧制）に入ると皆敬礼して表敬したものである。その頃の冬は不思議にも雪深く吹雪いた。上級生はバスも車もない通学路に雪道を付け幼い中学生や女学生の先頭に立った。岩船には本町の武談会や町の至動会と並んで徳行会があった。試胆会や制裁や談話会があった。日本は軍国で教育はスパルタ式だった。戦渦激しい中でも学業は厳しく度々勤労動員が掛けられた。農作業に開墾。勝木トンネル工事。米軍に備え岩船海岸の塹壕掘り。後日、その場所から上陸する米軍の成り行きを眺めた。

この頃、学校から海軍兵学校予科への推薦話があって先生の来訪をみた。護国のために死ぬ気で勇んでいたものだ。昭和二十年八月十五日終戦。灯火管制の解かれた夜、日露戦争に従軍した祖父母は私の海兵行きが無くなって良かったと喜んでくれた。二十歳からは生き延びられないと思っていたのが変わった。延命が図られた。

最近、書に関心を持ち書業を知り度く金子鴎亭（近代詩文書・文化勲章）の対話集に接した。冒頭、師範学校時代に結城伴造の「広やかな関心を以て書に接せよ」との言葉に大いに触発されたとあった。青年の意志が堅まったのだ。中学（旧制）の入学式に「質実剛健」「堅忍不抜」を諭され、本校生には今一つ「積極性」が足りないと奮起を促された結城校長その人を発見した。今もあてはまる言葉だと実感する。重ねて、論語の始めにある学而一の中の「朋有り遠方より来る、また楽しからずや」を思い出す。過日旧中四十七回と新制二回生の合同喜寿を祝う会では皆この言葉を真理として言い合った。

昭和二十三年、学制改革により村上高校二学年に編入。藤沢光雄校長は朝礼で米国の占領政策を噛んで含めるように話された。学園は不安と混迷の中にあった。軒下の氷柱が溶ける季節に草野浩一君と化学の先生の沢田可信（後に東北大学金属研助教授）の自宅に一泊し青春談議、その帰路に阿部藤策校長のお住まいに寄り、ラロのスペイン交響曲を蓄音機で聴かせていただいた。人格形成は二十代前半が大事だと承った。丁度、阿部先生の息女が寄宿舎より帰宅し、一寸話題に入られた。飛天を眺める思いだった。

今年は戦後六十五年。「戦争を知らない児」が日本人口の２／３以上を占める時代になった。両方を観た私共は平和を希求して止まないのである。

（文中敬称略）（東京都小平市在住）

故郷の東京を離れて その

大竹　茂久（新４回）

母方の親戚に医者がいた。遠山衡平氏が村上中学校で校友会長をされていた。今の県立村上高校の前身である。私はその先生の口利きで中学に入学できたのである。教室は生徒で一杯で入りきれない位であつた。

私の左隣りには米内という名の生徒がいた。ある時、休憩時間に、彼と米内光政陸軍大将の話になったが、彼は急に小声になり「僕はその人は叔父に当たる。一族が拘束されるという噂があり、近いうちに仙台の方に転校する」と。その話の後一週間位で学校へは来なくなった。その後どうしているのかと思うことがある。

父も兄と同様肺結核で、昭和二十一年四月に他界した。息を引き取った時に裏庭に出て泣いたが、桜と梅が一緒に満開になっていたのを覚えている。当時は食糧難で中学には弁当を携行しないで来る生徒が多数いた。十五円のコッペパンを半分にして分け講堂の外の日当たりの良い場所で級友と食した事を思い出す。一番苦労したのは、教科書を買う金がないので、学校で春や夏の授業のない時にはバイトをした。駅構内の除雪、田んぼの株割り、土手普請、アイスキャンデー売り、イナゴ捕り、金になることは悪事以外はなんでもやった。家計を助ける事が先決で、勉強は二の次になったことに後悔はしていない。

高校三年生となり就職の時期を迎えた。昭和二十七年の春先に、新聞の広告欄に東京消防庁の職員募集を見た。当時は、東京に帰るには入京制限があり、公務員にならないと帰郷することは出来なかった。新潟市の消防本部で

行われた試験には、同級生が五名来ていた。面接の時に試験官が受験票を見て「何だ。君は東京生まれか。」と聞いたので、「はい。東京で生まれたからには東京の土になりたい。」と答えた。最期の身体検査が終わると、川村正君がいた。彼とは消防学校も入校は同期となり、勤務地も数回一緒になった。勿論、川村君とは退職も一緒で今でも高校の同窓会関東支部で活躍している。関東支部総会の会場は今は四谷駅前のスクワール麹町で行われているが、その場所は麹町消防署があった跡地で、初級監督者として最初に勤務した懐かしい思い出多い所である。都心での大きな事故や火災・災害には何故か多く出場し表彰も多かったことを覚えている。強烈な印象に残像として今でも脳裏にあるのは、市ヶ谷にある自衛隊での三島由紀夫を中心とした乱入事件である。後日、発表する機会があればしてもよいと思う。

（東京都豊島区在住）

村上を離れ半世紀

町田　信（新11回）

昭和三十四年に村上高校を卒業し、埼玉県浦和市（現さいたま市）に移り住んで五十年が過ぎた。近年、頓に村上が懐かしくなり訪ねる回数が増している。最近、テレビで村上が舞台になったり、紹介されているが極めつけはＪＲ東日本の吉永小百合さんが登場するコマーシャルである。

私は三年間担任が高橋大二郎先生で、英語の授業ではテンポがよく、迫力もあり、指名されるので油断ができなかった。今年も先生から賀状を頂いた。お元気な様子、何歳になられたのだろうか。特に興味をもったのは安冨先生の世界史で、ゆったりとした語り口調で解り易く、遠い世界文化の一端を知ったような気がした。授業中、先生から瀬波海岸の道路拡張工事で、石組みの遺構が発見され発掘調査が行われることを聞いた。数日後に見学に行くと、黄色の扁平な石を積み重ねた遺構があった。磐舟柵ではとも言っていたが異なるようであった。この見聞が後年に考古学に興味をもつ切っ掛けとなった。

部活は野球部に所属していたが、二年生の夏に急性胆嚢炎になり、その後も完治せず充分な活動が出来なかった。卒業後に摘出手術をした。野球は大学時代にはクラブチーム等に所属して続けた。この経験が、中学校の教員時代の後半、野球部の監督を二十年余行う契機となった。西武ライオンズの内野手の平尾君は教え子の一人で、一昨年の巨人との日本シリーズでは優秀選手賞に輝いた。

昭和三十九年、埼玉県の公立中学校の社会科の教員となった。最初に赴任した学校の近くには、多くの貝塚や遺跡があり、分布調査や遺物の研究を行い、考古学の雑誌などに投稿した。長期休暇中には県の遺跡の発掘調査に参加した。昭和五十年には、日本考古学協会に入会を認められた。現在住んでいる家は発掘調査を担当した、縄文時代の大遺跡の一角にある。

浦和市内で数校勤務し、退職後は浦和市内の公民館で社会教育指導員として勤務した。生涯教育の手助けにと思い、歴史の講座を始めた。最初は自分の勤務館だけだったが、幸いなことに評判となり、次第に呼ばれる場所が増え、五年間の勤務を終えてからは急増した。今でも年間三十回前後を実施している。受講者は第二の人生の方々だが、皆熱心に筆記用具を走らせている。内容は主に江戸時代の社会、文化、文化史や幕末維新史、それに原始から江戸時代までの考古学の話だが、歴史文学にもふれている。新しい資料を次々と作成しなければならないが、私に話をする場を与えてくれる公民館や団体、聞いてくれる多くの人たちに感謝している。昨年、初めて村高同窓会総会に、同期の小薬、片野君と出席した。瀬波温泉での懇親会は幅広い年代の人たちが集い、盛大だった。その後、村上在住の同期生と夜遅くまで盛り上がった。

（さいたま市緑区在住）

鴻之舞金山跡を訪ねて

菅井　真人（新13回）

ここ四、五年夏の間四ケ月ほど北海道東部オホーツク海側、北見市留辺蘂町でくらしている。戦後の昭和二、三十年代は製材工場と水銀鉱山で繁栄したそうだが現在は衰退し過疎の町と化している。

一昨年の秋、介護疲れを癒すため妻と日帰りドライブを計画し鴻之舞鉱山跡を訪ねることにした。私が入社した会社には新潟県出身の先輩が二人いて、一人の先輩は生まれが村上で育ちが台湾、青春時代は秋田だといって斗酒なお辞さずのＩ先輩がいた。私が村上高校出身だと解ると自分の兄が君の先輩に当たると気に入ってくれて酒席によく誘われた。ある日居酒屋でのこと、テレビニュースで「世界で一番含有量の多い金鉱脈が鹿児島の菱刈鉱山で発見された。」との報が流れた。その時、Ｉ先輩が「金は何たって鴻之舞鉱山だよ、東洋一と言われたのだから。俺たち学生時代先輩たちが半年間採鉱で働いた場所だよ。秋田工専（現秋田大学工学部）時代の昭和十八年頃の話

だ。」この話が退職後も耳に残っていていつか行ってみたいと思っていた。ここ留辺蘂町にも戦前の金鉱試掘跡があちこちの山に穴となって残っており現在イトムカ水銀鉱山が昭和四十八年閉山した後、乾電池等の再資源工場として石北峠近くの一角で再稼動している。

北見市から国道３３３号線を紋別方面へ檜や白樺、エゾ松、唐松などが紅葉して黄金色に山全体が染まった原生林の中、金八峠を越えて下ること二十分、鴻之舞金山跡碑が見えてきた。車を降りて行くと白樺林に囲まれた小学校跡の小さな広場の中に金山慰霊碑と鴻紋軌道記念碑（その下に銀色の道の歌詞が書いてある）の二つの碑があり、エゾリスが白樺からおりてきて出迎えてくれた。しかし周りを見渡して見ても鉱山の建物らしき跡は何もなく道路を跨ぐ廃線と鉄橋が残っているだけだった。がっかりして下ったら上藻別駅逓所に着いた。そこで初めてかつて栄華を極めた鴻之舞金山を知ることになった。駅逓とは大正時代に数十キロ毎にある当時の旅館だそうだ。この鉱山に永年勤めた鉱山関係者五人が往時の賑わいを残すただひとつの建造物である上藻別駅逓所に鉱山機器、トロッコ、金鉱石、当時華やかだった町の写真資料など開拓時代の生活用品を民具と共に展示して鴻之舞の歴史を守つていて華やかなりし当時の話をしてくれた。東洋一と言われた金鉱山は昭和十～十五年、戦後の二十六年～三十五年頃までが最盛期で一万三千人ほど住んでいて小中学校はもちろん警察署、郵便局、映画館、劇場、花街とまさに北の大地人里離れた山の谷間に出来たゴールドラッシュの町、黄金郷だった。金八峠の由来も鉄火な人気芸者金八姐さんに因んでついたと聞く。しかしその栄華も金鉱脈の細りで昭和四十八年鉱山は山を閉じる運命となり現在は遠くに煙突が見えるだけの原生林と秋草の生い茂る地図にも載らない地となった。理由は環境破壊となる精錬所から流れ出る鉱毒を処理する為すべて埋めざるを得なかったのだ。こうして鴻之舞の名は五十六年の歴史と七十三トンの金を産出して北の大地に消えたのだと言う。黄金郷には夢とロマンがお似合いだが歴史を知らずに訪れた旅人にはなぜか儚さ、淋しさが迫ってきてＩ先輩にどう伝えようか・・・とオホーツク海の港町紋別市へ山を下りた。

そして偶然知ることとなった鴻紋軌道記念の碑「銀色の道」歌碑は作曲家宮川泰が父の勤務の関係で小学生の頃この鴻之舞に住み、鴻之舞と紋別間に軌道車が走っていた風景をイメージして作曲したとのこと。『遠い遠いはるかな道は：。銀色のはるかな道』作詞塚田茂　歌　ダークダックス一九六〇年代うたごえ喫茶で北上夜曲、北帰行、あざみの歌、忘れな草をあなたになどロシア民謡と共に放歌し青春した。アラ古希世代の今、憂国に駆られたあの運動と実らぬものへの憤怒、感傷にエネルギーを燃やした半世紀前を懐古しながら旅の想いを閉じる。

（千葉県四街道市在住）

平成21年度会費拠出状況（平成22年3月18日現在）

旧34回生	３口	新14回生	33口	昼11回生	２口
39回生	５口	15回生	33口	夜11回生	３口
40回生	10口	16回生	21口	夜13回生	１口
42回生	２口	17回生	22口	夜15回生	１口
43回生	２口	18回生	26口		
44回生	３口	19回生	20口		
46回生	４口	20回生	17口		
47回生	１口	21回生	23口		
新１回生	１口	22回生	39口		
２回生	９口	23回生	９口		
３回生	５口	24回生	１口		
４回生	３口	25回生	２口		
５回生	30口	26回生	１口		
６回生	13口	27回生	２口		
７回生	10口	28回生	１口		
８回生	30口	29回生	３口		
９回生	26口	30回生	５口		
10回生	19口	31回生	１口		
11回生	11口	33回生	１口		
12回生	12口	35回生	１口		
13回生	18口	36回生	１口		

維持会費納入のご協力をお願いします

同窓会関東支部の活動を支える唯一の財源として、皆様に年間一口（2000円）以上の維持会費をお願いしています。同封の振り込み用紙にて納入をお願いします。

昨年度はこのように沢山の方々からご協力をいただきました。本年度もなにとぞ、よろしくお願い申し上げます。

ゴルフ同好会臥牛会

同好会「臥牛会」発足秘話？

鈴木　亮（新9回）

村高関東支部同窓会には発足以来実に二十二年の歴史を持つ同好会があり、それがゴルフ同好会「臥牛会」だ。

活動は春秋二回のコンペ開催である。日本オープンの七十四回にはかなわないが、今年の春で四十五回を数える。この会は五回卒の先輩の音頭で始まった。昭和六十二年の暮れに会則が出来て、翌年の四月に日高ＣＣで第一回コンペを行なった。臥牛会は旧制村上中学、新制高校に在籍・卒業した者で構成し、先輩、後輩の絆をもって楽しい交友を目的としている。会員二名以上の推薦を受けて入会出来ると会則にある。分厚い記録帳が歴代の事務局・幹事が引き継ぎ、開催地、成績等詳細に残されている。これまでの開催コースは二十一カ所、延べ参加人数は一四〇〇名を超えている。バブルの頃は東京よみうり、武蔵、総武、筑波、紫等々名門コースでの開催も行われた。二〇回は大日向ＣＣ、三〇回記念大会はサンコーＣＣで前泊し前夜祭を行い宴で親交を深めた。平成五年の秋のコンペでは貸し切りバスで新潟の中条ＧＣまで出向き本校のゴルフ同好の方々と合同コンペを盛大に行なった。最大は平成七年石坂ＣＣで行われた秋のコンペ四三名の参加者があり、スタート前の挨拶時は壮観であった。ここ数年は常時三〇名前後の参加者で賑わっている。旧制中学校卒の大先輩の方々、新制村高初の女子生徒の方が参加してくださっているのも楽しい。年々、女性の参加者も増え、実力も伴い時には会長の私がグロスで抜かれることもあり、頑張らなければと感じている。臥牛会は先輩、後輩の垣根を取り払い一緒にゴルフのプレーを楽しむ素敵な交流の場だ。プレー後のパーティも楽しい時間。お城山（臥牛山）の麓で学んだ者が趣味を通して交友を続けている。

私は第三回からお誘いをもらい、十一回から柄にもなく幹事・会長等を引き受けた。年二回春秋のコンペを皆勤で続けられたことは我が健康と皆様方のご支援の賜と感謝している。今後は若い方々の新しい感覚に会の運営を任せるべく四十一回から新幹事にバトンを渡した。村高関東支部のホームページにもコンペの御案内、成績等を掲載している。ぜひご覧いただきたい。皆様の入会をお待ちしているので、推薦二名こだわらずお気軽に事務局に連絡をください。

臥牛会ゴルフクラブの益々の発展と継続を願い発足秘話の一八番ホールを上ります。（千葉県鎌ヶ谷市在住）

第四十四回臥牛会 ゴルフコンペの結果

平成二十一年十月二十二日（木）茨城県取手市の藤代ゴルフ倶楽部で臥牛会の秋季コンペが開催されました。

今回は初参加者四名があり、女性四名を含む六組二十四名で素晴らしい秋空のもとでゴルフを大いに楽しみました。プレー後のパーティーでも今回はゆっくり出来ました。二十二年目の伝統のゴルフ同好会も二十、二十一回生の参加者が多くなるなど若返りが出来つつあると先輩方も喜んでいました。初参加で自己申告ＨＤ十三という二十一回生の伊藤マユ子さんが実力を発揮し、ドラコン・ニアピンも取るなど堂々の二位に入り、強者揃いの男性軍を驚かせていました。成績は左記の通り。

・優　勝　高橋　国栄（二〇回生）
　ネット７１（ＨＤ13）
・準優勝　伊藤マユ子（二一回生）
　７２（ＨＤ13）
・三　位　磯部　哲也（一四回生）
　７３（ＨＤ13）

第四十五回臥牛会 ゴルフコンペの結果

平成二十二年四月八日（木）さいたま市大宮国際ＣＣで春季コンペが開催されました。前の日の雨も上がり菜の花、桜の咲き誇る中で初参加三名の五組二〇名で行いました。乗用カート、キャディさん付き、春の日差し快晴ほぼ無風の恵まれた条件のもと、コースに点在するウオーターハザードの池ぽちゃにもめげず楽しくプレーすることが出来ました。プレー後のパーティーも先輩後輩の垣根を越えて交流を楽しみました。前回の健闘でのハンディ減を乗り越え磯部さん、伊藤さんが上位に入りました。成績は左記の通り。

・優　勝　磯部　哲也（一四回生）
　ネット６８（ＨＤ11）
・準優勝　志田　　裕（二〇回生）
　７３（ＨＤ19）
・三　位　伊藤マユ子（二一回生）
　７４（ＨＤ10）

同期会便り

第19回生

深まる絆

磯部　衛（新19回）

我が家の「夜香樹（やこうじゅ）」が新芽を伸ばし夏の夜に甘い香りを放つ準備をしています。知り合いの人生の大先輩よりビルマ戦線で戦死した友人への想いと一緒に幼木をいただきました。以来十余年、毎年夏の夜に芳香と大切な友を想う「とき」を私に与えてくれます。

「夜香樹」香る夜は、高校時代の籠球に明け暮れていたこと、部活やクラスの仲間達の顔が浮かびます。

還暦を目前に同期のみんなに会いたい気持ちが募り関東支部の同窓の集いに参加しました。終了後の同期会で次回同期会の連絡世話人を引き受けましたが、多忙と不規則な仕事を理由になかなか実行できませんでした。

しかし、同期の仲間の励ましと協力で、今春三月十三日同期会を開催することが出来ました。会場はさいたま市、武蔵一宮「氷川神社」近くの結婚式場です。出席者は十七名、久しぶりの再会に、皇后陛下から「やっとお会いできましたね。」とのお言葉をいただき研究成果をご説明申し上げたと言う安富さんの話をはじめ、一人一人が近況を述べ合いました。また、出席出来無かった方々から届けられた近況を回し読んだりして三時間が楽しく、あっという間に過ぎてしまいました。

二次会もほぼ全員参加でカラオケ、「高校三年生」の歌声が響き、皆は村高生の頃にタイムスリップでした。

次期連絡世話人を三組の高橋さんが引き受けてくれて、「開催地は横浜だよ！」と約して、お開きになりました。

会が重なるにつれて拡がる仲間、深まる絆・・・・。今年も夏に「夜香樹」の香りに友を想い、次の同期会を楽しみに待ちたいと思います。

（さいたま市岩槻区在住）

ふるさとだより

・ふるさとがより近くに

平成21年7月18日（土）日本海東北道の工事が進み中条ＩＣから荒川胎内ＩＣまで開通しました。続いて平成22年3月28日に神林岩船港ＩＣが開通しました。次は村上瀬波温泉ＩＣが22年度中に開通の予定です。日本海東北道の開通がすすみ関東からふるさとまでより近くなりました。

・ふるさとの星空を眺めてみませんか？

関東に比べ星空の綺麗なふるさとで星空を眺めてみませんか。殿岡の南大平に1994年に完成したツインドームの天体観測施設ポーラースター神林があります。口径35センチメートルと40センチメートルの望遠鏡が2台配置されており、すばらしい星空の眺めと星雲・星団などの神秘的な宇宙観察をすることができます。今回開通した神林岩船港ＩＣからは車で20分です。毎月第2・4金曜日の午後7時から午後9時まで一般公開が行われています。参加費は村上在住の方100円、市外の方は300円です。

・新名所喜っ川の「のれん」前

昨年はＴＶ番組「鶴瓶の家族に乾杯」やＪＲ東日本の大人の休日倶楽部のＣＭに村上が登場しました。休日倶楽部のポスターになったのが村上大町の鮭料理の店「味匠喜っ川」の店頭の「鮭」を染め抜いたのれんの前に立つ吉川小百合さんでした。このポスター以来のれん前が観光写真のポイントとなり休日などでは「のれん」の前で自称〇〇小百合さん達が撮影の順番待ちに列を作るほどです。（町田さんの記事を参照ください。）

編集後記

大滝前編集長の後を受け、佐藤会長、小野幹事をはじめとする先輩諸氏と快く執筆いただいた方々に支えられ、よちよち歩きの新米編集長が川上幹事とともに何とか二十一号を発行までにこぎ着けました。皆さんから見れば前号にくらべ物足りない紙面かも知れませんが関東支部の会員の皆様の親睦・交流に役立てばと願っています。ご意見、ご投稿をお待ちしています。

あわせてホームページへのご支援もお願いします。

山下治郎